

稲 山 会

通 信

第38号

2019年1月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

2019年を迎えるにあたり（楽しく、元気な1年に）

明けましておめでとうございます。本年が稲門山の会の皆様にとって、良き年であること祈念しています。楽しく元気な1年であって欲しいです。

平成31年は本年4月で終わり、5月1日より新元号が始まります。新天皇は山好き、8月11日の山の日の設定にもご協力をいただいたと聞いています。個人的なことで恐縮ですが、浩宮様とは30年ほど前、インド駐在時に大使館でお会いしています。好青年でした。

さて、現役の山の会ですが、昨年は天候が悪く、実施できなかった山行が多かったのですが、新人8名と経験者2名の新歓山行（乾徳山）、経験者3人による夏の北ア全山縦走（槍ヶ岳から日本海）、未経験者中心の夏の南ア山行（甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳）が無事遂行されました。昔（50年ほど前）は日本海に抜ける山行などは、蛭と蝮で敬遠されたものですが、最近では気軽（？）に実現してしまうようです。当通信38号に北と南の2山行の記録が載っていますので、読んでください。現役の雰囲気伝わります。

OB・OGの稲門山の会の方ですが、井村前代表を引き継いだ新体制が、昨年1月に発足したのですが、少しばかり若返った役員会の期待されたエース、行方正幸OB（S50年卒）が、5月にボルダリング中に事故に遭われ、しばらくは活動に参加出来なくなり、残念です。

もう一つ、私より一回り若い64歳の高野啓介OB（S51年卒）が、8月16日に明神岳で行方不明になり、9月2日に県警ヘリにより、わさび沢の滝の下で発見されました。高野OB行方不明後、役員会のご家族と行動を共にし、ご本人が自宅に帰ることにご協力出来たこと、良かったと思っています。

高野OB遭難の件は、メール網で皆様に流し、その後報告書も作りましたが、報告書は関係者だけに配り、役員会の内部記録にしました。私が代表になった時、こういうことだけは起きて欲しくないと思ったことが起きてしまい、大変残念です。只、高野OBは知る人ぞ知る優れたクライマーで、第2次RCCの末裔、特別な人だったので、今後、稲門山の会の会員で、同様なことは起こらないだろうと思っています。

稲門山の会は、早稲田大学山の会のOB会で、親睦の場、サロンと思ってきました。でも山に登る人はおり、万が一その人が遭難された時は、助けに行きたいと思うのが心情です。今後 稲門山の会・役員会は、会員の遭難事故にどのように対処すべきか、検討してゆきます。

2019年1月 稲門山の会代表 斉藤雄二

総会・新年会のご案内

今年も稲門山の会の総会・新年会が近づいて参りました。現役の山の会の学生も多数参加します。同期及び年時の近いお仲間をお誘いの上、是非ご参加頂き交友を深めると共に、現役会員から若いエネルギーを貰って下さい。今年は、迫田泰敏 OB の紹介で、日大山岳部 OB で、1995 年のエベレスト北東稜の登攀隊長（当時 33 歳）の古野淳氏に講演をお願いしています。古野淳氏は、現在、山岳コンサルタントとして多方面でご活躍されております。貴重なお話しが聞けるものと思います。

日 時：2019 年 1 月 26 日（土）午後 3 時から

場 所：早稲田大学大隅会館 301～303 号室

会 費：6,000 円（別途年会費 4,000 円）

稲門山の会役員会

春のハイキング（矢倉岳）のご案内

2019 年春のハイキングは足柄山地の矢倉岳（870m）に行きます。草地の広がる山頂からは箱根外輪山、丹沢山塊、富士山が一望できる素晴らしい景観の山です。地藏堂に下山すると満開の桜が待っていることでしょう。今年も OB・現役合同で楽しいハイキングをしましょう。皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さい。

日 時：2019 年 4 月 7 日（日） 10:00 集合

集合場所：小田急線新松田駅前 箱根登山バス停①番（10:05 発地藏堂行き）

行 程：新松田駅＝地藏堂（バス乗り換え）＝足柄万葉公園バス停～矢倉岳～
地藏堂バス停＝新松田駅 （コースタイム 2 時間 10 分）

幹 事：新井昭夫（S46 年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306

松村幹雄（S48 年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

※参加ご希望の方は 3 月 31 日迄に上記幹事宛にご連絡下さい



新歓風景（応援部）



新歓風景（大隈銅像付近）

現役山行（1）夏山合宿－北アルプス全山縦走－

利藤暢（法学部 4 年）

日 程：2018 年 8 月 9 日～18 日

参加者：利藤暢（L 4 年）井上直斗（4 年）柳田野衣（2 年）

縦走のシーズンともいえる 8 月に北アルプスの全山縦走を行った。計画を立てる段階からかなりの日数を費やすことがわかっていたため、フルで参加するのが困難だった井上とは縦走の途中で合流しようという形をとった。縦走で途中合流というのが初めてだったということもあり、少し不安を感じつつ 8 月 9 日に利藤・柳田の 2 名で上高地より縦走をスタートした。

行程としては、

- 8 月 9 日 上高地～殺生ヒュッテ
- 8 月 10 日 殺生ヒュッテ～槍ヶ岳～三俣山荘
- 8 月 11 日 三俣山荘～鷲羽岳～烏帽子小屋
- 8 月 12 日 烏帽子小屋～船窪岳～蓮華岳～針ノ木小屋
- 8 月 13 日 針ノ木小屋～爺ヶ岳～冷池山荘（井上と合流）
- 8 月 14 日 冷池山荘～五竜岳～五竜山荘
- 8 月 15 日 五竜山荘～白馬岳～白馬頂上宿舎
- 8 月 16 日 白馬頂上宿舎～朝日岳～拇海避難小屋
- 8 月 17 日 拇海小屋～親不知 を計画していた。

日によっては 13 時間以上の行動になり、かなりタフな山行になった。実際の山行を振り返ると、おおむね計画通りであり、不安であった合流も順調に行えた。

8 月 12 日の烏帽子から針ノ木への大移動などはやはり



不帰キレット

予想通りの辛さはあったが、その日を終えたときの達成感もやはり格別だったように

に思える。また、天気に関しても、小雨や濃霧などはよくあったものの、大雨や強風は縦走後半の 2 日間だけだったため、かなり恵まれていたように思える。



槍ヶ岳山頂にて

ただ、8 月 15～16 日にかけて吹き続けた強風と大雨は流石に辛かった。翌朝まで耐えてなんとかテントをたたんで明日には朝日岳を越えよう！とメンバーで話あって荒ぶるテントの中

で耐えたが、16日の早朝に強風でテントのフライシートがちぎれ、ポールがまがり、山小屋に駆け込んで停滞するか下山するかという選択を迫られ、山小屋に停滞することを選んだ。

この時点で、肉体面ではみな元気であったが、精神面では相当バテている部分もあったように思える。テント内で大声で歌ったり、どうしようもない小ネタで爆笑したりして縦走のモチベーションを保つようにした。停滞明けてから親不知までの行程は絶好調であった。親不知着を

予定していた8月17日に1日で白馬から梅海小屋まで移動し、18日には親不知にたどり着いた。その後、海に飛び込み、温泉に入り下界に帰ってきたという実感に浸った。



朝日岳手前の縦走路

以上少し長文になってしまいましたが、こうして文章にすると改めて楽しい縦走だったのだということが実感できます。初縦走だったメンバーの柳田も初縦走と思えないくらいタフだったし、井上の合流と歩荷にも助けられました。4年最後の長期縦走としては素晴らしい山行でした。



日本海・親不知にて

現役山行（2）夏山合宿－甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳－

齋藤拓海（法学部2年）

日程：2018年8月25日～27日

参加者：齋藤拓海(L2年) 井上直斗(SL4年) 白石みなみ(4年) 利根川祥望(2年) 桂一湧(1年)

8月25～27日に甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳を登ってきた。台風20号の影響が心配だったが列島を早く通過し、南アルプスは晴天に恵まれたので良かった。

初日は移動日とした。混雑の為、甲府から広河原までのバスで立ち続ける羽目になった。ベースとなる長衛小屋でテント設営後、時間に余裕があったので運動を兼ねて仙水峠に行った。小雨の降る中、甲斐駒ヶ岳の白い岩壁が見えて翌日の期待が膨らむ。ここは電波が通じたので、翌日の天気も確認した。

2 日目は双児山を経由して甲斐駒ヶ岳を登った。参加者は皆、基礎体力があり順調に進んだが岩場ではやや苦戦する場面もあった。登りは山頂へ直登し、下りでは足を取られる白砂に注意しながら摩利支天にも立ち寄った。山頂から望む八ヶ岳や鳳凰三山は素晴らしかった。



甲斐駒ヶ岳山頂にて



小仙丈ヶ岳から望む仙丈ヶ岳

3 日目は小仙丈ヶ岳経由で仙丈ヶ岳を登った。夜明け前に出発しヘッドライトを点灯させ進む。小仙丈ヶ岳からは雄大な山容を堪能しつつなだらかな稜線を歩く。山頂からは北岳を筆頭に南アルプス北部の主要な山々が見渡せ、中央アルプス、富士山も望むことができた。下りは藪沢新道を通った。

下山後、甲府駅に戻り、駅から徒歩で15分ほどの距離にある喜久乃湯に立ち寄って疲れを癒した。太宰治も通ったという噂の銭湯は、風情があっておすすめである。



仙丈ヶ岳山頂にて

2018 年秋のハイキング（大野山）の報告

松村幹雄（S48 年卒）

秋のハイキングは丹沢南西部の大野山へ行きました。10 月 7 日は台風 25 号の影響を心配していましたが、当日は幸い晴天となりました。小田急線・新松田駅からバスに乗り大野山入口バス停で下車して登山口を目指して歩き始めました。登山口のすぐ手前で、バスに乗り遅れた後発組がタクシーで追いつき、全員集合となりました。今回は初参加の上原 OB を含めて OB11 名、学生 3 名の総勢 14 名です。



登山口から右手の古宿集落へ登る道を辿ります。元気な学生 3 名はどんどん登って行きます。OB は後からゆっくりと登ります。廃校となった共和小学校跡を過ぎると道はやがて林の中を登ります。そのうち牧草地の中の急な階段状の道を直登です。直射日光が暑く感じられます。急登を終えて一休みして、明るい風景を見ながら頂上へ向かいました。



頂上では、丹沢の山並、丹沢湖、富士の裾野を眺めながら、昼食と歓談を楽しみました。何故か隣で中高年のデュエットがギターを弾きながら懐メロを歌っていました。

下山は御殿場線・谷峨駅を目指します。ススキの穂が日光に輝く中を下ると、正面に小田原市街と相模湾が見え、右手には金時山、明神岳等絶景です。3 時過ぎに谷峨駅に到着し、電車で松田に戻り、新松田駅前の居酒屋で恒例の OB・現役合同の懇親会を開催して

盛り上りました。この季節にしては暑い日でしたが、楽しい 1 日でした。

コースタイム

新松田駅 9:35＝大野山入口バス停 9:55 (10:00)～共和小学校 10:50～大野山山頂 12:50 (13:20)
～谷峨駅 15:10 (15:38)＝新松田 15:56

参加者

OB: 吉田 (S38)、松村(啓) (S38)、斉藤 (S41)、金子 (S41)、佐久間 (S43)、上原 (S43)、
島田 (S46)、新井 (S46)、福田 (S46)、松村(幹) (S48)、柴原 (S52)

現役: 目次 (4 年)、糸林 (1 年)、伊藤 (1 年)



投稿：登山と薔薇—その歴史に触れて—

金子治雄 (S41 年卒)

はじめに

登山とバラ、一般には何の関連性も無いような 2 つの趣味を長い間続けてきました。山を記事にする稲山会通信に、山と無関係なバラについて書くのも気が引けましたが、私にとって両者は切り離せないほど密接な関係になりました。バラを始めた時、栽培方法を学ぼうと様々な本を読みましたが、その方法論では著書の個人的な見解が多く、どれが正しいのか迷いました。改めて登山と比較すると登山は命が掛かるため、その技術は標準化されていますが、バラは失敗しても怪我をするわけでもないので、理にかなっていないような個人的な主張が許されている世界であることが解りました。それ以来登山で培った自然を相手のモノサシによって個別に対処した結果、短期間で栽培法を身に着けることができました。

またバラを始めてから、登山では落葉樹の土壌、火山灰地、伏流水、棚田、霧など、有機栽培を行う上で観る風景が多様になり、風景を眺めるだけだった登山の楽しみが倍加しました。

更に、登山史とガーデニングの歴史を調べていく内に、英国で生まれた近代登山とガーデニングの 2 つの思想のルーツが解り、自分の中で無関係と思われた 2 つの思想が、思いのほか双子の関係にあった事も解りました。

ガーデニングを始めたきっかけ



初めて魅せられた高山植物に似た
園芸草花：アメリカンブルー

40 代の終盤に、ガーデニングに引き込まれたきっかけは、若い頃北アで見た高山植物の群落と、全く同じイメージの草花との出会いでした。それは当時新しく登場したアメリカンブルーと名付けられた原名コンボルブルスという北米原産の青い小輪の草花で、大型コンテナに溢れるように群植した姿に接した時、このような花が身近にあれば、山に行かなくても身近で自然を感じられるのではないかと思ったのです。それまで私が知る草花は、ガーベラとかベゴニアなど人工的な花が大半であり、栽培しようとする意欲は湧きませんでした。

こうしたきっかけで、当時ようやく冬の花として売り出されたパンジーやノースポールを大樽に自分で植え、毎早朝、出勤前、愛犬との散歩後の水やりと花柄摘みが習慣になりました。毎朝花の手入れをしていると、草花が日に日に大きく広がって来るのが判り、改めて植物が生き物であることを実感したのです。こうして植物が応えてくれるのが判ると次々と好みの草花を集め、やがてバラが加わりました。

バラの歴史

バラは 5000 年の歴史を有し膨大な品種を擁する植物です。主な原産地は、ユーラシア大陸西の今のトルコ、シリア辺りで、有史以前から栽培されて来たと言われています。バラの原種は、昆虫が受粉しやすい一重の花で、自らを守るためにトゲに包まれた細い枝は密集して、藪状のシュラブという大型の樹形になります。バラは頂芽優勢という性質を持ち、枝の先端しか花を付けませんが、枝が密集するシュラブ樹形には利点として、花をたくさんつける事と、昆虫を惹きつけるすばらしい香りがありました。

何時の時代にも高貴な香りは人々を魅了します。現在でも最高級の香水にはバラのエッセンシャルオイルが使われています。



原種系ローズ・一重咲き（イングリッシュローズ・キューガーデン）

現在ブルガリアで香水づくりのために栽培されるダマスクローズのカザンリクは、八重の花弁 3~4 トンから、たった 1% のエッセンシャルオイルしか出来ませんが、中世において、蒸留の過程で副産物として生ずるローズウォーターが薬の代わりに使われてきました。花弁から香水を得るためには一重より、花弁が圧倒的に多い八重咲き品種の方が効率的なため、近世になると八重咲きバラへの品種改良が盛んに行われるようになりました。

バラの歴史を辿ると、文明が成熟した地域や国々に移動して行き、その軌跡は世界史そのものであることも知り驚きました。古代ペルシャ帝国からギリシャ、更にローマ帝国に渡り、滅亡後新たに勃興したイスラム世界に移りました。そして聖地奪還の十字軍が西欧にバラ苗を持ち帰り、それらが寒冷な気候で育つことが判ると各地で大いに栽培され、やがて市民社会が勃興し金融センターとなったオランダで多くの品種がつくられました。平戸の松浦史料博物館に行ったとき、展示物の中に江戸期オランダからもたらされたバラ図鑑があり驚きました。そのオランダも数度の英蘭戦争で英国に敗れて衰退すると、バラは英仏に移り、そこでも多くの品種が作られました。英仏はアヘン戦争後中国に進出し、現代バラの基本になった四季咲き、剣弁高芯咲き、お茶の香り（ティーローズ）の品種が英国に渡り、更に我が国からもノイバラとハマナシを手に入れ、ランブラーローズや寒冷地でも育つフロリバンダに改良しました。



クォーターロゼット咲（イングリッシュローズ、ジ・アレンウィックローズ）

一世を風靡したハイブリッド・ティ

私たちのバラのイメージを決定づけたのは、ピースを初めとするハイブリッド・ティローズで、ピースは第 2 次大戦直後に誕生しアメリカで花が咲きました。現在世界最大のバラ会社になったフランスのメイアンが、剣弁高芯咲きの豪華な巨大輪のバラを作出し、戦後の平和への願いを込めてピースと名づけました。ピースは戦火の影響を受けなかったアメリカで一世を風靡し、その後ピースの遺伝子を引き継いだハイブリッド・ティの豪華なバラが続々と世界中で生まれ、私たちがバラと言えば大輪の豪華なハイブリッド・ティをイメージするほどバラの代名詞になったのです。



剣弁高芯咲き（ハイブリッドティローズ・ピース）

自然なシュラブローズに魅せられて

私がバラを始めたきっかけは、オールドローズの存在を知ってからでした。その頃、英国では余りに人工的に改良されたバラから、自然なオールドローズに回帰しようと、イングリッシュローズなど古いバラを改良したシュラブローズが登場し始めていました。我が国では江戸時代から花を愛でる花卉園芸の歴史がありましたが、それはあくまでも花単体、植物単体を鑑賞するための行為で、植物を組み合わせで美しい庭を造るガーデニングの概念とは異なりました。山に行く代わりに身近に自然を感じようと始めた私のガーデニングでは、ピースのようなバラは合わず、仕立てを工夫すればシュラブローズの自然なやさしい雰囲気の方が、ガーデンローズとして庭づくりに向いていることも解りました。こうしてオールドローズやシュラブローズの持つ奥深さと美しさにのめり込んで行きました、私がシュラブローズを始めた頃が、世界的にもバラの転換期が始まっ



ディープカップ咲き（イングリッシュローズ、ロイヤル・ジュビリー）

た頃で、この頃ふとした縁で日本ばら会の国際コンクールの審査委員長と知り合いになり、シュラブローズ愛好者の立場から 2 年間国際コンクールの審査員を務めさせて頂いたことも懐かしい思い出です。

山を再開して改めて登山史を学んだ

バラへの傾斜が一段落した 50 代の終盤に、気象部の先輩だった中村さんの乗鞍追悼山行の誘いを受け参加し、先輩の方々が乗鞍のピークに元気に登る姿と、井村さんから一代上の洋任さんと雪山に登っている事を伺い、私も同じ釜の飯を食べた同期となら、もしかすると雪山に登れるかも知れないと想い、直ぐに杉村兄に声をかけ正月から高尾山や大岳山で身体作りを始めました。夏には小田兄も加わって白馬に登り、秋からの月一の山行に雄二、稲吉、秋野、沼田、宮尾、渡辺兄たちも加わり、その年の 12 月には冬山装備を整え有志で天狗に登り 4 月初に赤岳、5 月初には唐松に登り、無理だと諦めていた雪山に対面出来ました。



常念乗越から槍ヶ岳北鎌尾根・東鎌尾根を望む
(1973 年 8 月)

このように 40 代の終盤から中断していた山に、心が再び盛り上がって来て、若い頃熱中して読んだ山の本や未読の本を、登山史に沿って順に読み始めました。改めて我が国の登山史を調べて行くと、幕末から明治初期にかけて来日した、お雇い外国人たちは英仏米独人さまざまですが、その中でも登山を行ったのは、米人モースと独人ナウマン以外は、外交官のアーネスト・サトウ、東京帝大教授のチェンバレンやディクソン、日本アルプスの命名者の冶金技師ガウランド、工部大学校教授のアトキンソンやミルンなど全て英国人でした。彼らはウェストンが来日する 10～15 年も前に、槍ヶ岳を初め各地の山に登りました。このようになぜ英国人だけが山に登ったのか不思議でなりません。この疑問は、嵐が丘のヒースなど 33 種の植物しか自生しなかった不毛の英国の地が、なぜガーデニング大国になったのかという疑問とも重なりました。

我が国に、宗教を離れて西欧流の近代登山の思想をもたらしたと言われているのは、志賀重昂の「日本風景論」です。「日本風景論」は小暮理太郎初め当時の多くの若者を熱狂させ、小島鳥水も急激に山に傾斜し、岡野金次郎と 2 人で白骨温泉から霞沢岳を越えて上高地に下り槍ヶ岳を登頂しました。

ウェストンは初対面の鳥水と岡野にラスキンの一文を朗読した

この山行後、横浜在住の岡野は、ウェストンが 10 年前に槍ヶ岳に登っていたことを知り、鳥水と 2 人で横浜のウェストンを訪ねたのです。この時ウェストンは 2 人に、ラスキンの近代画家論の第 4 巻の「山の栄光」の一節を朗読し、登山がいかに崇高なものであるかを語りました。そして英国山岳会に倣って日本山岳会の設立を勧めたのです。その時、ラスキンにチンプンカンだった鳥水は、その後「ラスキン伝」を著した英国山岳会長老のハリソンの著作を原書で愛読しました。



ターナー（グリゾン州の雪崩）

ラスキンは 19 世紀中盤に、不人気だった風景画家ターナーを擁護する「近代画家論 4 巻」を執筆しました。彼はその著作において、18 世紀末から世界に先駆けて産業革命が進行し、一早く産業社会に突入していた英国社会に対して、市場の欲望だけを充足するための産業効率化を優先する社会の未来に、自然と人間との原初的な関係を回復させようと、芸術や建築の分野から警鐘を唱え、英国知識人に大きな影響を与えました。ターナーは現在では英国で最も人気のある画家ですが、それまでの風景

画と異なって大気や光、風など自然の持つ圧倒的な存在感を描き、近代人が風景を捉える美学として、フランスのノルマンジーの画家たちを経て印象派の画家たちに受け継がれました。

夏目漱石の「三四郎」にも「君、ラスキンは読みましたか？」というシーンが出て来ます。英国留学していた漱石も当時の英国知識人の空気は感じていたのでしょう。

西欧近代登山の思想はどのようにして生まれたのか

ウェストンが鳥水と岡野に語った、西欧近代登山の思想はどのように産まれたか、簡単に辿って見ると、18世紀以前のヨーロッパの人々にとって、我が国のように山に神が宿っていると考え、ピークに登って遥拝する宗教登山の伝統はなく、平原の多いヨーロッパでは狩の場は森であり、高山は交通の邪魔だけの無縁の存在だったようです。当時の人々は、自然を風景として捉える考え方を持たず、18世紀ルソーによって初めて未開の自然を美しく感じる思考を学びました。今日、ヨーロッパの人々が自然を美しく感じる思考は、近代になって生まれた近代人としての考え方でした。



ウェストンが見た西穂～奥穂(2017年6月徳本越え時)

特に英国は緯度も高く荒涼とした荒地が広がり、自然は癒されるものでなく、人間を脅かす敵対する存在でした。しかし18世紀に入り、国が豊かになった英国貴族の間で古代ローマに関心が芽生え、グランドツアーと呼ばれたイタリア旅行が大流行し、そこでイタリアの風景やローマの廃墟を描いたクロード・ロランの影響を受け、ロランの描く風景すなわちピクチャレスク(絵になる風景)に目覚めたのです。貴族たちはロランの絵を買い求め、領地にピクチャレスクな風景を求め、広大な風景式庭園を造りました。

更にピクチャレスクの美意識は、絵画的風景を求める人々を英国各地の旅に誘い、その結果自然の美しさ、素晴らしさを賛美するワーズワースなどロマン派詩人を誕生させたのです。ちなみに小暮理太郎と共に近代登山の思想と日本の山岳美との融合を生涯模索した田部重治はワーズワースの研究者でした。

ロマン派詩人やラスキンの影響を受けた冒険心に富む英国人たちは、崇高な自然の象徴である山に注目し、アルプスの高峰を目指し、ウィルスがウェッターホルン、ウインパーがマッターホルンに登頂したことから一気に近代登山いわゆるアルピニズムが始まったのです。富士に登った幕末の初代英国公使オールコックや2代目公使パークス、そしてお雇い英国人たちは、全てこの影響を受けていたと想います。

ラスキンの思想はやがてガーデニングの思想に引き継がれた

一方ラスキンは自然観照や近代登山だけでなくアートの分野にも大きな影響を与えました。ラスキンは、芸術の理想を職人の手作りだった中世の様式に見出していました。この思想はモリスのアーツ&クラフト運動に引き継がれ、アートは教会や公共のための特別なものではなく、個人の日常の暮らしの中でこそ、手仕事によって楽しむものだと言ったのです。モリスの運動は我が国では民芸運動という別な形で影響を受けました。ラスキンやモリスの思想は貴族の広大な風景式庭園でなく、自ら庭をいじりながら庭を楽しむコテージガーデンや個人の庭づくりを楽しむガーデニングの思想に引き継がれたのです。

今日私たちが眼にするイングリッシュガーデンは、20世紀初頭、女流ガーデナーのガートルド・ジェキールによって完成しました。昔、英国で20世紀初頭の古い園芸用品のカタログを掲載した洋書を購入しました。それを見るとファニチャーや彫像、コンテナ、園芸用具がいつの時代に揃ったか、どこの国のデザインの影響を受けたか良く解ります。英国は我が国と同じ島国ですから、イタリア、フランスの影響を大きく受けていました。英国も必要な文化は大陸から手に入れ、ソフトを独自開発していました。

投稿：カムイミンタラの山ートムラウシ訪山の記録ー

太郎良博（S43 年卒）

金子(41 年)、新井(46 年)、島田(46 年)、後藤(49 年)そして太郎良(43 年)。この 5 名の強者達が、いざ大雪山（ヌタカムウシュペ）の大縦走に挑まんとその山麓に降り立ったのは、2018 年 7 月 20 日の夕方のことであった

ヤンペタップ川に沿うて、僕らを乗せた小型バスはゴトゴトと走って行く。乗っているのは、僕らのほかに 6 名ばかりの年配の登山者がいるばかり。ヤンペタップ川は激しく屈曲しながら、その豊かな水量を存分に奔らせ、ある時は川幅広く、またある時は淵をなし、そしてまた河床一杯に流倒木の堆積を散乱させている。激しいガタガタ道を揺られ揺られてほぼ小一時間ばかり。不意にあたりが明るんだと思ったら、そこが大雪山高原温泉の湯宿であった。

今回のこの山行は、僕のちっぽけな一言から現実のものとなった。大雪山（ヌタカムウシュペ）を、北から南へトムラウシ山まで一挙に縦走しようというのである。各々、今回の山行に寄せる思いには格別のものがあり、5 名の気持ちはあつというまに一つとなり、計画がどんどんと具体化していった。テントを担いで鍋釜しょって、久しぶりの重装備での約 1 週間にもわたる山旅。僕らの心は熱く熱く高まっていった。

トムラウシ、トムラウシ・・・この 5 文字が、まるで呪文のように僕たち仲間の合言葉となっていた。

「今年の北海道の夏は特別だね」道内の人たちは皆、異口同音にそう言った。その言葉通り、とにかく雨模様のはっきりとしない天気ではあった。昨夜も、雨が激しく屋根を叩く音を聞いた。7 月 21 日の土曜日の朝、窓を開けると雨は大方あがっていたが、あたりは一面のガスで、今日の登山が思いやられた。

午前 7 時に僕らは大雪高原温泉の湯宿から松浦岳（緑岳）を経て白雲岳の避難小屋へと登山を開始した。久しぶりに背負う 20 数キロのザックは、今



重荷を背負って松浦岳に向かう



固く締まった雪田をトラバースする

の僕らには結構こたえる重量ではあったが、それでも昔とったきねづかとやらで、順調に高度を稼いでいった。急な登りを終えると大きな雪田が現れた。あたりには、エゾコザクラやイワカガミなどが一杯に咲き誇っていた。雪田は思った以上に固く締まっており、歩行にはかなりの慎重を要した。雪田を 2～3 過ぎたところで一本取った折、ポツリポツリと雨がぱらついてきた。見晴るかす松浦岳は、厚いガスに覆われてその姿を窺うことはできない。しかも上部はかなり風が強そうだ。「さあて、これから先、かなり難渋しそうだな」との暗い思いが胸のうちをよぎる。

僕らよりも早く宿を発った登山者が、どんどん下山してくる。状況を訊いてみると、「上部は

とにかく風がひどくて、とても先には行けません」「緑岳の頂上は風で体が飛ばされそうなので途中で降りてきました」・・・という具合。北海道在住で大雪山に詳しいという単独行の登山者は、きっぱりとした口調で、「この状況で先に進むのは危険です。明日も天気が良くないという予報ですし」と言う。そしてまた、北大山岳部の生きのよい若者 5 名も、「途中で引き返してきました」とのこと。そこで僕たちは、「はてさて、どうしたものか」と思案した。楽しみにしてきたこのトムラウシ山までの縦走。諦めるのはまことに残念ではある。しかしこの今の状況を考えると、余り無理をするのもどうしたものか。そこでリーダーの「引き返す」との最終決断。心残りも少なからずあったけれど、安全第一。50 余年に及ぶ山登りのキャリアを誇る僕たち 5 人の、それは勇気ある決断でもあった。

このような状況で僕たちは元の大雪山高原温泉の宿に戻り、もう一泊そこで過ごすことになった。翌日、例のガタガタ道を層雲峡迄小型バスで送って貰った。都合よく道央を横切って帯広まで走るバスの便があったので、そのバスで帯広に出て、そこからレンタカーを借り受け、トムラウシ温泉の東大雪荘にその晩は投宿したのであった。



慎重に岩稜帯を登高する

翌 7 月 23 日の月曜日。天候は良好だ。僕たちは勇躍、トムラウシ山に向かった。登山口から小 1 時間も登ると傾斜も少しゆるみ、あとはカムイ天上を経由してだらだらとした登りが続く。はるか行く手には、僕たちが目指しているトムラウシの岩峰が高々と聳えている。チリン、チリン・・・チリン、チリン・・・。歩を進めるごとに深山の静寂に染み入ってゆく熊鈴の音が、確かに僕たちが北の山に深く分け入っているのだということを改めて思いおこさせる。

こまどり沢の渡渉点に降り立つと、そこらにいよいよ本格的な登りとなった。そこから前トム平を経て目的地の南沼幕営地に着くまでが思った以上に長く、そして辛い登行だった。

さて、前トム平から峨峨たる巖が積み重なった急斜面をトラバースし、鞍部によりやく至り着いたその時。眼下に広がったのは、まさに目に染みるような緑なす湿原であった。キラキラと、まるで妖精の瞳のように輝く池をいくつも散りばめ、白銀色に照り輝く雪田とそこから下りくる清らかな流れ。原一杯に咲き競う花々。ピンク色のエゾコザクラ。黄金色に輝くエゾキンバイ。あくまでも純白そのもののエゾイチゲ・・・。それはこれまでに見たことがないほどにまことに豊かな高山の花園なのであった。さらに、手を伸ばせばすぐにでも届きそうなところに聳え立つ、トムラウシの岩峰。そして青く抜けるような夏の天空・・・。まさに絶景。まさに高山の花園。限られた者のみに与えられた、トムラウシの秘所を覗き見るその喜び。僕たち 5 人は、思わず 20 代の若者に帰ったような気分でその絶景に酔い痴れたのであった。＜カムイミントラ＞。まさしく、「神の遊び場」と称すべき、そこは別天地であった。

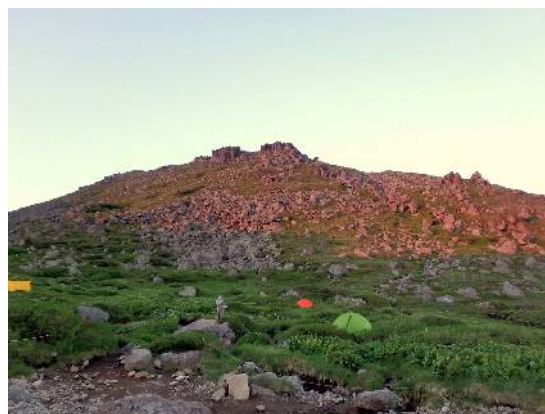


トムラウシ公園を俯瞰する

ここ、トムラウシ公園を過ぎると、ほどなく目的地の南沼幕営地に到達することが出来た。時に午後4時。早朝5時に登り始めたのであるから、実に11時間に及ぶ登行ではあった。



南沼に幕営する



夕照のトムラウシ山頂

翌7月24日。天気は良好。なればこの掛け替えのない機会を、もう1日、この山上の楽園でゆっくりと過ごそうということになった。ゆったりと朝飯を楽しんだ後、目の前に聳え立つトムラウシの頂を目指して登る。積み重なる巖をよじ登ること小半時、遂に僕たちはトムラウシの絶頂に立つことを得た。風は強いが、天気は晴朗。周囲360度、さえぎるもののない北の山々の連なりが、これでもか、これでもかと言わんばかりに、波濤のごとく押し寄せてくる。



トムラウシ山頂にて

北の方、おどかな緑なす原向こうに頭をもたげるは、化雲岳、五色岳、忠別岳、白雲岳、松浦岳、旭岳・・・等々。これぞ、ヌタクカムウシュペ（大雪山）の脊梁を成す峰々の連なりなのだ。また東すれば、石狩岳、ユニ石狩岳がその原始の大なる姿のままに寡黙に座し、さらにその下手にはニペソツ山の鋭鋒がひときわ目を惹く。南の方には、屏風をたてかけたように、重畳と日高の山々が逆光のなかに連なり、そして西の方に目を転ずれば黄金ヶ原の広大な傾斜湿原を従えて、コスヌプリ、オプタテシケ山、美瑛岳、十勝岳、上ホロカメットク山、下ホロカメットク山、富良野岳の山並みが延々と続く。さらにその果てに聳えるは、夕張、芦別の山々か。まことに稀有壮大、人跡皆無、原始そのままのそれは大観であった。



天上の花園（南沼幕営地周辺）

さらにトムラウシの頂から眼を脚下に転ずれば、そこには北沼、南沼を中心として多くの池が、緑なす湿原にキラキラと朝陽を受けて光り輝いている。柔らかな湿原の辺を縁どるのは、ハイマツであり、ダケカンバであり、ガンコウランであり、さてまたツガザクラ等の、丈低く臥せ生ゆる灌木の数々である。さらに広らなる緑の褥のいたるところに、エゾコザクラ、エゾキンバイ、エゾイチゲの花の絨毯がまことに麗しく広がりを見せている。まさしくこれぞ、アイヌの民が＜カムイミンタラ＞ー神の遊び場ーと言いならわした高層の湿原と言わず何と

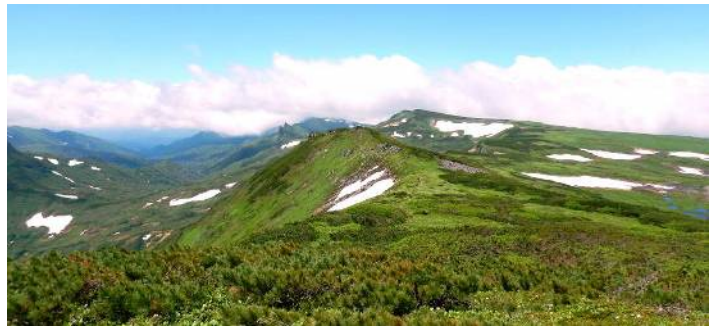
言おう。然り。これぞ、＜カムイミンタラ＞であり、トムラウシ山こそは、確かに＜カムイミンタラの山＞と実感したのであった。



神秘の色を湛える南沼

そして、つりがね山を左手に見て、かの「黄金ヶ原」がその広大極まりない傾斜湿原の一端を覗かせている。さる山仲間がかつて口にした言葉、「俺は北アルプスとかを随分と歩いてきたけど、いまだかつてこんなにも素晴らしい所があるということを知らなかったよ」。確かに黄金ヶ原を遠くに見て広がるその光景は、他では到底目にすることが出来ない大観であった。

この日は天気も穏やかで、快適極まりない日よりであった。各人それぞれに山上での至福の時間を過ごした。高嶺の花を愛でたり、周囲の景色を楽しんだり、高まる心のうちをカメラに収めたり、あるいはまた緑の褥に思いっきり仰向けになって「トカゲ」を楽しんだり。いまだかつて経験したことがないようなのんびりとした、うれしい、それは一時であった。日頃から快活なS君は、さらに高揚した口調で言ったものだ。「いやあ現役の時からいまだかつて、こんなに素晴らしい過ごし方をしたことはありませんよ。今日のこの1日を過ごせただけで、僕はもう今回の山行は大満足ですよ」と。



三川台・黄金ヶ原を遠望する

それは、僕たちがかつて経験してきた「沈黙」（沈）というそれとは全く異なる次元のものであった。それは僕たち5名の、50余年に及ぶ山登りのキャリアと、人生70余年を経てきた年輪がなせる余裕から生まれたものであったろう。まことに得難い山上での一日なのであった。



早朝の日高山脈遠望

明ければ7月25日。僕たちは4時に起床し、早々に朝食を摂り、そしてテントを撤収した。天気は今日も良好で、空は唳唳と晴れ渡り、白い雲が高々と流れていく。肌寒さを覚える中、6時には南沼の幕営地を発った。美しい花々の咲き乱れる中を歩みつつ、僕は幾度も幾度も振り返ってはトムラウシの絶頂を仰ぎ見た。そして思わず感極まり、涙が溢れ出るのを止めることができなかった。余りにも素晴らしかったトムラウシの山。トムラウシの山懷での2日間のゆったりとした一時。僕たちの心を存分に満たしてくれた、それは余りにも贅沢な一時であり、そしてまた、恐らくまたとは味わい得ぬであろう貴重な一時ではあった。



名残を惜しみつつ下山

僕ら 5 人はみんな、今回の山旅に満ち足りた思いで一杯だった。年初来温めてきたその山旅も、思いもかけぬ悪天候に遭遇し、完遂することは叶わなかった。でも幸いなる哉。トムラウシ、トムラウシ・・・と唱え続けてきたそのトムラウシ山に、天候にも恵まれ、しかも山上でかつて経験したことのないほどの素晴らしい幕営生活を楽しむことが出来た。まさに、＜カムイミンタラ＞一神の遊び場―というに相応しい秘所を窺うことが出来たのだ。



無事の下山を喜ぶ



祝杯！トムラウシ温泉にて

夕餉時、僕らは北国の美味ともどもエゾシカの肉に舌鼓を打ち、地の麦酒に喉を潤し、地の酒に盃を重ね、そしてまたオショロコマの骨酒に酔い痴れ、トムラウシの山旅のことを顧みては尽きることなく語り続けたのであった。

カムイミンタラの山。トムラウシ。

僕らにとって、決して忘れることの出来ない山旅となったのである。

*** 大雪山で出会った貴婦人達 ***



女王：コマクサ



エゾヒメクワガタ



エゾノツガザクラ



エゾコザクラ



チシマツガザクラ



トカチフウロ

OB 会役員、常数英昭さんによる「登山教室」の後半です。前半（37 号）の気象クイズは好評でした（編集者）

投稿「山の会登山教室（後半）」

つねかず
常数英昭（S49 年卒）

4. 天気図

講習で天気図の作成をしたかったが、準備が間に合わずできなかった。天気図の読図はぜひ身に付けるべきである。できれば作図もマスターしたい。筆者が現役時は NHK ラジオ第 2 放送で毎日 10 時、16 時、22 時に気象通報が放送されていた。合宿時にはテント内で交替で必ず天気図を作成して、翌日の行動を決める判断材料にしていた。しかし、2014 年度からは放送は 16 時の 1 回になったことを今回初めて知った。

気象予報士制度ができ、民間気象予報会社が認可され、天気図を作図しなくてもインターネットで画像が配信される現在では、天気図作成技術は必須ではないのかもしれない。しかし自ら作図することで天気現象をより深く理解できるのではないかと思う。少なくとも天気図読図技術の講習を続けたい。都会にいたときでも日頃から新聞等で天気図に目を通し、そこに表わされている天候とその変化を身体で感じるようにしたいものである。

5. 観天望気

実際に入山したら観天望気が大事なことが、出席した役員の倉川 OB から体験を通して語られた。空を見上げて、空の色や雲を観察し、空気の流れを肌で感じ、今後の天気の推移を予測する一助とすることが重要である。そのためには、入山前から天気図で天候の推移を把握しておくことが欠かせない。

6. 遭難事例によるケース研究

1) 夏山における低体温症：北海道トムラウシ山周辺（ツアー登山）

2009 年 7 月 16 日、北海道のトムラウシ山（2,141m）で 1 パーティー 18 人のうち 8 人が遭難死亡した。ツアー登山で中高年の参加者であった。当日の気温は 7℃～6℃～3.8℃で推移、小屋出発時の午前 5 時 30 分から 8 時まで降雨があり、平均風速は 15～18m、20m を越える強風も吹いた。その中で 8 人が低体温症で死亡した。

本遭難ではヒサゴ沼避難小屋を出発した責任者の判断が問われる。しかし、このような低体温症（かつては「疲労凍死」と呼ばれた）は夏の北アルプスなどの稜線でも起こり得る。天候によって行動を判断する力を身に付けなければならない。

筆者は山の会の夏山合宿で十勝岳～トムラウシ山～石狩岳～ニペソツ山の縦走に参加した。山行全体をとおして天候に恵まれず、ヒサゴ沼避難小屋の近くに幕営して 1 日停滞した記憶がある。下山して十勝三俣駅だったと思うが 8 月でストーブがつけられていた。

2) 夏山における落雷：西穂高岳稜線（高校夏山登山行事）

1967 年 8 月 1 日、松本深志高校の教員、生徒が西穂高岳登庁後、13 時 30 分から 13 時

40 分頃に独標付近で落雷に襲われて 11 人が死亡した。午後、天気が悪化して、岩稜帯の逃げ場がないところで落雷にあったものである。

夏山では早朝～午前中は快晴でも、午後、ガスが湧いて天気が急速に悪化することがある。特に、大気が不安定で積雲、積乱雲の発生時には十分な注意が必要である。松本深志高校では 2017 年 8 月 1 日、遭難事故後 50 年にあたって、校内の慰霊碑の前で追悼式を開催したとのことである（毎日新聞）。

筆者は 1967 年に高校 2 年であったが、ワンダーフォーゲル部に所属し、同学年の部員 3 人パーティーで個人山行で初めて北アルプスに行き、表銀座縦走で中房温泉から入山して 1 日目合戦尾根をやっと登って燕山荘前で幕営し、初めて槍ヶ岳を望んで感激した。2 日目は快晴のもと稜線を縦走し、午後大天井岳を通過したころからガスが出て予定の槍ヶ岳まで行けず、水俣乗越で槍沢に下ってテントを張った。3 日目、槍沢を上って槍に登頂してその後、南岳への稜線から天狗原（氷河公園）に下ってテントを張った。4 日目に槍沢経由で上高地に下り、夜行で帰京した。その帰宅した当日だったと思うが、西穂高岳での落雷事故が起きたことを知って非常に驚いたことを覚えている。

7. 民間会社による山岳天気予報

筆者は本登山教室の講師を務めるに際して、「山の天気入門講座・夏山の気象（基礎）」（アルパインツアーサービス株式会社主催、於新橋）を受講した。最近の気象庁の天気予測はコンピューターや気象衛星、アメダスの活用などで筆者の学生時代とは激変している。また、民間気象予報会社が設立されて、各山域の詳細な天気予報が配信されている。登山にあたってはそのような最新のテクノロジーを活用する一方で、天気図の作成・読図、観天望気によって自らの感覚を研ぎ澄ましていくことも求められる。

天気に関する科学的な知識、理解を深めることもますます必要である。今後とも会として天気に関する講習、研鑽を積み上げていきたい。

8. 冬山講習

冬山講習は次のとおり実施した。

1) 地形図の読み方（講師：常数英昭） 約 20 分

現役が雪上訓練を 3 月に行う黒百合平、東天狗岳、西天狗岳の「25000 分の 1 地形図」のコピーを用いて、渋の湯からの登山道を地図上でシュミレーションした。等高線の読み方、尾根、谷筋、植生、地図記号、非対称稜線の読図などを講習した。

2) 雪山入門（講師：倉川秀明 OB） 約 60 分

導入として、雪山登山への不安、雪山登山の楽しさ、＜不安から楽しさ＞への基本的な考え方を話した。次に「雪山登山の全体像」として雪山登山用具、気象、歩行技術、危険回避、生活技術＝生存技術、幕営とビバーク、登山計画・山行計画、雪上訓練、緊急時対策の各事項を詳細にレクチャーした。

以上、登山教室の概要を記した。このような教室を今後とも続けていきたい。

昨年 8 月明神岳で高野啓介 OB が亡くなられた。同時代の友人による追悼文を載せ、高野 OB のご冥福を祈ります（編集者）

追悼 高野啓介君のこと

行方正幸（S50 年卒）

私が大学 2 年生（1973 年）の時、早稲田大学山の会に「岩登りがやりたい」と小柄だけれど、生意気で気の強そうな 1 年生が入って来た。高野啓介だ。この年は新人がたくさん入ってきた。高野とは夏合宿で北海道の大雪山系を縦走したが、その頃それほど一緒に登山をした記憶はない。その後、高野は 2 年のはじめに山の会をやめて社会人山岳会に移り、クライマーとして岩登りの研鑽を積んでいくことになる。

大学 3 年生の時、夏合宿で上高地から剣岳まで縦走をしていると、我々のパーティを追いかけて来る奴がいた。合宿前に山の会を辞めた高野だった。彼は社会人の穂高岳の岩登り合宿を終えると一人で我々のパーティを追ってきたのだ。縦走 12 日目、剣沢の天場に着くと「剣岳の岩場と一緒に登らせてくれませんか」と言ってきた。調子の良い奴だと思いつつも人懐こい笑顔で言われると断れないんだよね。これが。

大学を卒業し、欧州アルプスに憧れて冬季登攀を始めると、ゲレンデで頻繁に出会う高野と穂高岳や谷川岳の岩壁でザイルを組むようになった。冬には広河原沢奥壁や一ノ倉沢第 3 スラブなども登った。その後、私は結婚して山の世界から離れて行ったが、高野との友情は山を離れても変わらずに続いていた。

昨夏（2018 年）、名達一彦から高野が上高地で行方不明になったと電話が来た。私はクライミングジムで大怪我をして入院中で、毎晩「明けない夜はない」と苦しいリハビリに努めていた。しかし、明神岳で遭難した高野には夜明けは来なかった。無念だ。本当に無念だった。

追悼 高野啓介君のことー冬の上高地ー

名達一彦（S50 年卒）

一枚の古ぼけた写真があります。1973 年 12 月 25 日、山の会の冬合宿の最終日に上高地・河童橋で撮った集合写真。

今回の高野啓介君の遭難に際して上高地へ向かう途次、しきりに思い出されたのがこの写真でした。

高野君をはじめ石原君、倉川君、調君、深澤君そして私の 1 年生 6 名は、蝶ヶ岳から燕岳への縦走隊のサポートメンバーとして蝶ヶ岳長堀尾根を登りました。1 年生の誰もが本格的な冬

山登山は初めてでした。眩く輝く穂高、風雪の中のラッセル。あるいは連日の吹雪に閉じ込められたテント内ではバカ話に大笑いし、テントの外に広がる雪原の凄絶さに胸打たれました。鮮烈な体験ばかりでした。

そして下山の日、河童橋で緊張から少し解放された面々が写真に収まっています。高野君は後列の左から 5 番目、赤いヤッケを着て柔らかな笑みを浮かべています。

2018 年 8 月、高野君は上高地をベースに何本かのクラシックルートを単独登攀する予定で入山し、明神岳の山懷で亡くなりました。最後の山行の日々、本格的な登山の原点であった 45 年前の冬合宿と冬の上高地のことが彼の心の裡にあったのではと思わずにいられません。



1973 年 12 月現役冬合宿で河童橋にて(後列左から 5 人目が高野君)

訃報

平成 30 年 1 月 25 日に井村英明さん(S40 卒)がご逝去されました。

平成 30 年 5 月 10 日に宮内隆輔さん(S39 卒)がご逝去されました。

平成 30 年 6 月 30 日に秋野匡拓(忠弘)さん(S41 卒)がご逝去されました。

平成 30 年 8 月 16 日に高野啓介さん(S51 卒)がご逝去されました。

平成 30 年 10 月 28 日に松浦(山本)正道さん(S42 卒)がご逝去されました。

故人を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

「巻頭言」と「編集後記」を同じ人が書くのはまずいと思い、編集後記は別の人を書いて貰う様お願いしたのですが、急な依頼で断られたので、今回まで私・斉藤が書くことにします。

高野 OB が遭難されたことは「巻頭言」に書きましたが、高野 OB 行方不明の一報が入ったのは 8 月 17 日でした。この時、稲門山の会有志による「雲ノ平」を目指すグループが鏡平山荘に入っていましたが、自発的に方向転換してくれて、18 日には日本山岳会上高地山岳研究所（山研）に入ってくれました。ここは高野 OB が明神山行のベースにしていた所です。私が稲門山の会の代表として山行変更のお礼を言うと、このグループの最長老（まもなく 80 歳）が「来年、また、雲ノ平に行く目標が出来たよ」と言ってくれたのは、「さすが山の会の OB」と大変嬉しく思いました。

高野 OB とは、ほとんど付き合いはなかったのですが、昨年、鬼籍に入られた他の 4 名の方とは一緒に山に登った仲間でした。1 月に亡くなられた井村 OB との山歴は通信 37 号に書きましたので省略するとして、5 月に亡くなられた宮内隆輔 OB は、私が 1 年の時の厚生部の部山行（6 月の谷川連峰、10 月の飯豊山、翌年 3 月の巻機山）のリーダーでした。卒業後、実業界で大成功されたことはよく知られております。

6 月に亡くなられた秋野匡拓 OB は、同期で、現役時代は殆ど一緒に山には登っていませんが、60 歳の定年以後は最初に谷川岳、その後は八ヶ岳や鹿島槍等々、何度も一緒に山に登りました。晩年は高尾山の山麓で悠々自適でした。10 月に亡くなられた松浦（山本）正道 OB は、私が 3 年の夏合宿で平パーティーのリーダーをした時に 2 年生で参加してくれました。松浦 OB は定年後も「老いらく山岳会」で活躍されていたのですが、最近体調を崩していると聞いていました。

暗い話ばかりだったので、明るい話も。今回投稿いただいた金子 OB の「登山と薔薇」も太郎良 OB の「トムラウシ訪山」も凄い内容・文章です。改めて稲門山の会の逸材であることを再確認しました。もう一つ、昨年秋の六大学野球、早慶第 3 戦で早稲田が慶応を破り、優勝のはずだった慶応を 3 位に引きずり落とし、早稲田は 2 位に浮上しました。第 3 戦は神宮の現場で観たのですが、9 回に 2 点を入れて逆転した時は、感激で涙が出ました。歳ですかね。今年は優勝してほしいです。

斉藤雄二（S41 年卒）記



2 位早稲田の校旗が行く



2 位早稲田の選手が行く、先頭は小島主将